

博士學位論文審査要旨

2023年1月24日

論文題目： 風景に刻まれた「基地の街」コザをみる
—子どもたちの作文からひろがる沖縄戦後史—

学位申請者： 木谷 彰宏

審査委員：

主査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 富山 一郎
副査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 村田 雄二郎
副査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 太田 修

要 旨：

木谷彰宏氏提出の学位申請論文は、これまで歴史資料として正面から扱われてこなかった戦後沖縄における作文ならびに作文教育から、沖縄戦後史を再検討するものである。沖縄戦後史はこれまで復帰運動ならびに反基地運動を中心に論じられる傾向にあった。こうした中であってこれまで学校教育の中で生み出された小中学生の作文は、復帰運動の大きな担い手である教員の思想や政治に対する考えの反映として検討されることはあっても、子供からの視点で作文を考察することはほとんどなされてこなかった。いわばこれまでの歴史研究においては、作文にある子供の言葉は歴史を担う言葉としては予め排除されていたのである。かかる点にかかわって、以下、本論文の特筆すべき要点を述べる。

まず本論文では、こうした歴史記述における言葉の排除の問題を、ジュディス・バトラーが検閲をめぐる第二の検閲として言及している「預めの排除 (foreclosure)」にそくして検討している。いわばそれは、歴史研究における検閲の問題である。またそこでは言葉として承認されていない領域から言葉を見出す作業が求められており、論文題目にもある「風景」という設定は、こうした言葉以前の言葉という本論文の問題関心を示している。さらに本論文は歴史の中におかれている「子供」という領域への問いとしてもある。これまで議論されているように、子供という領域は歴史的産物であり、基本的には近代の誕生と不可分である。しかしながら植民地的状況ならびに占領状態においては、こうした近代の前提である子供の領域は、想定することはできない。本論文は文字通り米国による占領状況にある沖縄において、子供の領域を沖縄の戦後の状況にそくして歴史化することにより、沖縄戦後史を再考しようとするものである。論文は序章と終章をいれて全7章からなる。

序章では、これまでの沖縄戦後史研究を批判的に検討し、子供の作文という領域の重要性を明確にしている。またその際、上記のバトラーにおける「預めの排除」をめぐる理論的検討も行っている。第一章「風景から歴史を叙述する」では、序章の問題設定を受けて、柳田國男、色川大吉、バルター・ベンヤミン、土屋健治らの風景にかかわる研究を取り上げ、歴史における風景を考察する方法論的枠組みを探ろうとしている。第二章「作文を読むための視点」では、戦後沖縄における作文教育の展開を、当時刊行されていた教育雑誌から検討すると同時に、作文を近年の「エゴ・ドキュメント」研究の中に位置づけ、作文を考察する方法論的検討を行っている。第三章から第五章は、作文それ自体の検討と、作文が書かれる具体的な現場から作文教育の意味を考察している。第三章「作文からみえる風景」では、作文から浮かび上がる風景を、日常的に存在する軍事的暴力を感知している風景、目指すべき未来としての想像の風景である日本とその日本が崩れ始める時に浮かび上がる風景の裂け目などを具体的に検討し、重層的な風景の在りようを浮かび上がらせている。第四章「作文からみえる〈教室の風景〉」では、教室における教師と生徒

の関係に注目し、沖縄の作文教育が、従来指摘されてきたような国民化あるいは日本人化を目的とする指導にあるというより、書くという行為が立ち上がる必要性あるいは子供たちの欲求をどのように生み出していくのかという「必要感」の醸成にあることが、指摘されている。第五章「風景に刻まれた「基地の街」コザをみる」では、第三章と第五章の検討をふまえ、嘉手納米軍基地とともに発展してきた基地の街コザ（現沖縄市）に焦点を当て、こうした基地の街の中で子供たちがどのような風景を作文に書きこんでいるのかを検討している。またその際、米軍相手の歓楽街ならびにそこで働く女性たちの存在が、子供たちにとっての風景として際立って浮かび上がっていることが指摘されている。終章ではこうした子供たちの作文の検討をとおして浮かび上がる断片的でかつ重層的な風景のありようから、いかに沖縄戦後史の新たな地平を見出すことが出来るのかということが議論されている。

以上のように本論文は、子供の作文とそこに書き込まれた風景を検討することにより、これまで歴史を担う言葉としてみなされていなかった領域から歴史を問うというきわめて挑戦的な研究である。またそうであるがゆえに、歴史学方法論の見地からさらなる理論的検討も必要となる。審査では作文のさらなる検討の必要性とともに、また従来の研究との違いとは何かといった点に質問が集中した。たとえば風景という設定に想定される視覚の記憶という問題は、事後的な言語化という潜在的可能性を持つのであり、視覚の記憶が言葉において事後的に何度も再解釈されるという展開が、いかなる歴史記述を生み出すのかという問題についてもさらなる検討が必要となる。

しかしながら、こうした疑問や指摘は、申請者の将来性への期待でもあるということも確認され、論文審査委員会は、木谷彰宏氏提出の学位申請論文を、博士（現代アジア研究）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると判断した。

総合試験結果の要旨

2023年1月24日

論文題目： 風景に刻まれた「基地の街」コザをみる
—子どもたちの作文からひろがる沖縄戦後史—

学位申請者： 木谷 彰宏

審査委員：

主査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 富山 一郎

副査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 村田 雄二郎

副査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 太田 修

要 旨：

木谷彰宏氏提出の学位申請論文にかかわる総合試験を、2023年1月10日の11時から12時半まで行った。木谷氏の研究分野である沖縄戦後史研究の知識、ならびに風景論などの方法論にかかわる理論的諸研究の専門知識について、審査委員が試験をし、十分な知識があることが確認された。また必要とされる語学(英語)の能力についても、十分な能力があることが確認された。よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目：風景に刻まれた「基地の街」コザをみる
—子どもたちの作文からひろがる沖縄戦後史—
氏名：木谷 彰宏

要 旨：

本稿は、「誰が何をどう書けば沖縄の戦後の歴史を叙述したことになるのか」という問いを起点として、沖縄の戦後の歴史を象徴する「基地の街」コザと、そこに生きる人びとの姿の一端を、初等中等教育期の子どもたちが書いた作文を検討することを通して叙述していくものである。

これまでの研究では、研究の前提として、ある枠組—例えば、「基地の島」として支配する米軍統治と、それに対して抵抗する社会運動史—を実証するものが歴史を語る史資料として扱われてきた。同時に、子どもたちが書いた作文は、歴史を語りうる言葉の位置を与えられてこなかったように思う。しかし、既定の枠組みに沿った前提や、予め既定の枠組みで史資料から歴史を語る時、そこから見えなくなること、こぼれ落ちてしまうものがあるはずだ。そうであるならば、見えなくなってしまうこと、こぼれ落ちていくものにこそ目を向けることが必要だ。このような問題意識から、本稿では、これまでの枠組みとは異なる形—「人々の生存の場から歴史を書いていくという視点」—で、沖縄の戦後に生きてきた人々の経験に着目し、人々の生身の言葉を紡いでいくことで子どもたちの作文からひろがっていく沖縄の戦後史の一側面を明らかにしていきたい。

その際、米軍占領下の沖縄の歴史を象徴するような街ともいえるコザの街に注目する。コザの街に注目するのは、コザが「基地に隣接し、戦後、基地から派生するエネルギーを吸収しながら個性的な文化を育み、形成されていったと思われる街」だからだ。コザに隣接する嘉手納基地は、米国の世界戦略の中で、恒久基地化が進み、主権的境界を越えて展開する、横断的支配の結節点として機能していった。その意味で、コザに暮らす人びとは常に戦争と背中合わせで生きてきたといえる。

コザの街については、これまで地理学的な観点から考察された研究があるが、これらの研究はいずれも地理学的な観点からなされたものであって、コザの街に生きた人びとの姿を必ずしも明らかにしたものとは言い難い。

そこで、本稿では、コザの街に生きていた人びとをまなざし、そこに生きる人びとの姿から、「基地の街」と呼ばれたコザの街について叙述していく。コザに生きた一人ひとりの経験それ自体は、小さな物語かもしれないが、私的な記録や記憶は、これまでの研究や公文書などの記録の網の目からこぼれ落ちて見えなかったものを、光で照らし、見えるようになし得るのではないか。人びとが生きる場所としてのコザの風景に目を凝らし、そこに刻まれた記憶や経験にはりついているつぶやきに耳をそばだてながら、「基地の街」と呼ばれたコザに生きた人びとが歩んだ歴史の叙述を目指していく。

まず、沖縄戦とそれに続く占領下におけるアメリカの被占領民に対する政策を、食糧配給と衛生政策の点から考察した。そこから見えてきたのは、占領下における沖縄の人びとは、ジュディス・バトラーのいう「不安定性」の中、つまり、社会的・経済的条件の中で不安定な存在として生きていたということだった。占領下の復興に寄与するとみなされた者は、「あやうく、嘆きうる存在」として政治的に承認されて生きていくことができたが、そうではないとみなされた者は「使い捨ててもよい」とされ、救済も受けられず、取り残され、時には死に至ることもあった。その点においては、米軍の占領統治は、アシル・ムベンベのいうネクロパワー（死なせしめる権力）

による政治＝ネクロポリティックスであったといえる。ネクロポリティックスのもとでは、多くの人が、「生ける屍＝(living dead)」とされる〈生〉の状態に置かれることになった。

上記のことを踏まえ、歴史を語る言葉について、バトラーの「予めの排除」に依拠しつつ、考察した。バトラーによると、人は「発話可能性を取りしきっている規範」を身体化することで発話主体とみなされるが、発話の可能性が危険に晒されていると主体が感知するとき「予めの排除」が生起するという。バトラーは、この「予めの排除」によって発話領域が定められるとし、その境界線を「切断線」と呼んだ。このことをネクロポリティックスの中で生きる人びとに当てはめてみると、「使い捨ててもよい」とみなされた〈生〉は発話主体とみなされず、発話可能性の領域外にいるとみなされてしまう。つまり、社会的・経済的条件の中で不安定な存在として生きていく子どもは発話主体とみなされず、語ろうとする言葉は歴史を語る言葉とみなされないことになってしまう。バトラーは、「切断線」の「まえ」にいるこのような人びとを感知するためには、想像することが必要だと指摘した。

そこで本稿では、子どもたちの作文もまた歴史を語る史資料と捉え、発話可能性の領域外におかれた子どもたちの作文を「切断線」の内に取り戻し、その言葉から風景を想起することで、「基地の街」コザで「不安定性」の中に生きる人びとの〈生〉の姿を明らかにすることを目指した。

第1章では、ネクロポリティックスのもとで、不安定な存在として生きている人びとの姿を想像するために、〈風景〉という視座を導入した。眼前にある風景や風景を描いたものから、いかなる方法によって過去にあった歴史の風景や心象風景を見出せるのか。そのことをこれまでの歴史叙述としての風景論から検討した。そこでわかったことは、歴史上のある風景を知覚するために必要なのは想像力であるということだった。それには、探究に向う〈構え〉と日常感覚を起点とする〈過去へのまなざし〉が触媒として必要だということである。「切断線」の外にいる人びとを風景の中に見いだすために、風景の中(内側)に入り込むこと、そして、その人びとの身体を〈まなざし〉、動的に捉えた風景の中で、その声を聴き取ることが叙述の起点となることがわかった。

第2章では、どのようにすれば作文から風景を析出できるのかを考えた。1950年代の沖縄の子どもたちを取り巻く言語状況や、沖縄における作文教育の展開を概観したのち、子どもたちの作文をみるための視点を、エゴ・ドキュメント研究から検討した。ドキュメントが生成される場面に注目すると、その生成の動機、書き手を取り巻く関係性、生成に至った書き手の経験や感情などが伺える。また、ドキュメントには他者の身体や声など、書き手の五感によって知覚された世界が描かれており、そこから動きのある風景を捉えうることもわかった。

第3章では、作文が書かれる以前の書き手の経験に着目して、沖縄の戦後において「国民教育」が進められている頃の三つの作文を読み解いた。これらの作文からは、作文を書く以前の書き手の経験による風景に、書き手の想像上の風景、自らの実体験による風景が加わり、重層的な風景がみえてきた。そこには様々な風景があり、その風景の中には書く以前の書き手の経験に加えて、書き手の身体や書き手以外の〈多声〉が含まれていることがわかった。

第4章では、作文が生成される教室に着目し、〈教室の風景〉として教室の中で紡がれる関係性について考察した。教員と子どもたちが豊かな関係性を築いている教室もあれば、沈黙と空白が長く重苦しい教室もあった。教室の中で様々な関係性がみられ、会話が活発になる場合は、「予めの排除」が強く働く余地は少なく、発話可能性領域は拡大し、「切断線」は前進する。逆に、関係性が希薄で会話が続かない場合は、「予めの排除」が強く働き、発話可能性領域が縮小し、「切断線」は後退する。子どもたちが書く必要性を感じるところに誘うために、子どもたちとの間に信頼関係を築き、褒めること、話すこと、そして作文をしっかり読んで、それに応答することに注力した教員がいた。このような教員の様々な工夫は、子どもたちを発話主体可能性の領域の位置に入れようと、「切断線」を「まえ」に動かした取り組みだといえる。

第5章では、それまでの叙述を踏まえ、作文からコザの街の風景とコザに生きる人びとの姿をみていった。

村の多くの土地が軍用地となったコザは、街として商業都市への転換を図るほかなかった。子どもたちの作文には、基地から放出されるエネルギーを求めて集まってくる人びとが書き込まれている。コザにある商業施設や娯楽施設は、ドルを獲得できる場となり、そのドルが街に“繁栄”をもたらしていく。だが、その“繁栄”はネオンの光が一瞬のうちに消えるような儚いものでもあった。また、人と人との関係にもすぐに消えてしまうような儚さがあった。その意味では、一時的な関係性が支配する、刹那的な空気を漂わせる街であった。

そのコザの街の片隅で、風景の中から不可視化されていった人びともいた。子どもたちの作文は、そのような人びとの姿を確かに捉えていた。それは「売春」に関わっていた女性たちの姿であり、非行少年と名指された子どもたちの姿であった。[彼女／彼ら]は、「喪失が嘆かれうるもの」でなく、「価値あるもの」でないとみなされ、都市化の波から取り残された人びとでもあった。さらに、[彼女／彼ら]の行為が、社会的な規範から外れているとみなされたがゆえに、発話主体としても承認されず、「切断線」の「まえ」にいた人びとでもあった。街に〈生〉の格差が生まれ、分断が生じていただけでなく、社会から疎外され、隔離され、排除しようとするまなざしにも晒されていた。それでも[彼女／彼ら]は生きようとした。子どもたちの働くという行為、女性たちの「売春」という行為は、生存のため、「基地の街」で生き抜くための“選択”から生まれたものであった。この生存戦略を使うこと—ネクロポリティックスに抗う行為—によってのみ[彼女／彼ら]の生存は可能であったのだ。